

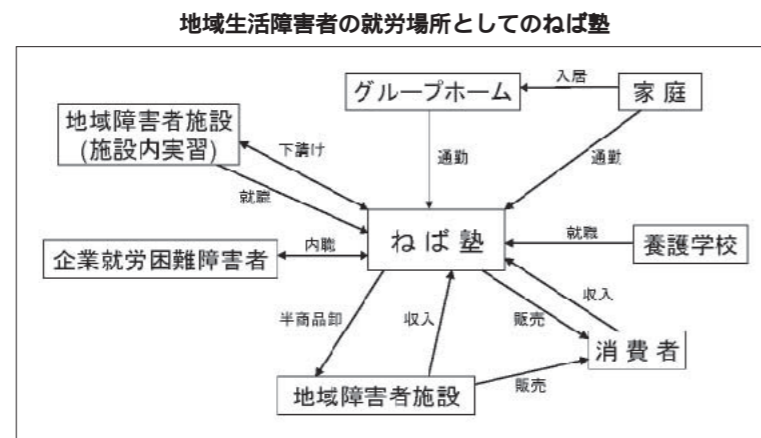
# ~ 障がい者の自信と誇りが生み出す 全国ブランドの石鹸 ~

## 特徴・ポイント

- ・大手石鹸メーカーとの明確な差別化（手作り感、無添加、ユニークなネーミング）
- ・障がい者の個性を活かした石鹸製造
- ・自信と誇りの再生に焦点をあてた育成方針

## 事業概要

「なるせのせおと」「白雪の詩」といったユニークな150種類以上に渡る無添加の石鹸の製造・販売。ほぼ全ての製造工程を障がい者が手がける。また「まぜたらせっけん」などの石鹸製造グッズの販売と、障がい者のためのグループホームの運営。総売上は2億円に達する。



## 障がい者が「根」をはる「場」所 = ねば塾の原点

普通の子供が親に甘えるように障がい者の子供達は甘えることができない。自分は迷惑をかけている、わがままを言うてはいけない、そういったことを自然と分かってしまっている子供達を見て、笠原氏は、知的障がい者のための支援施設を仲間と共に設立する。しかし「先生、もう施設嫌だから帰りたい」という言葉を聞く。恵まれた施設の中ではなく、主体性を持って生きがいを持つためには施設での施しではなく、社会で働くということが必要なのではないか。そんな思いから、障がい者の方々が社会に「根」をはる「場」所として、ねば塾の設立に至る。

## 大手石鹸メーカーとの差別化: 手作り感にこだわったユニークな石鹸

1981年ねば塾の障がい者2名が建設土木会社の職を得る。さらに1983年、県から3万坪の公園清掃工事を受注し、安全な職場を確保する。しかし、冬場に仕事が無くなってしまいう上にねば塾への入塾希望者が県外からも殺到してきた。そこで石鹸製造を始める。障がい者が安定継続して働くためには、生活に密着したモノであることが必須条件であると考えた末の石鹸であった。さらに当時琵琶湖汚染の問題で石鹸が目玉されていた上に笠原氏が化学が得意であったこともあり、廃油を利用した無添加の安全・安心というコンセプトを創る。最初の3年間は在庫と借金の山であった。しかし、転機が訪れる。ねば塾の活動を知った石鹸製造の職人が指導に来てくれることになったのだ。そのつながりを活用し顧客を紹介してもらう。また大手の石鹸会社に見学にも行かせてもらった。ねば塾は大手にと

って競合ではない。むしろ大手が受注しない小ロットの注文も貰えるようになっていく。石鹸製造の機械も他社から譲り受けた古いもの（昭和28年製）。ねば塾らしい石鹸とは何かのイメージもこの当時掴めてきた。障がい者が持つ素朴さ、純粹さといったものを形にしたい。大手の機械化が進行する一方で、逆に大半の工程に人が携わる手作りの良さを活かさないか。昭和28年製のアナログ機械がそれを可能にした。知的障がい者の人々はデジタル化された機械は使えないことが多いが、アナログであれば、習熟することができる。そういった取組を継続する中で、徐々に石鹸が売れ始める。1991年には、ロコミだけで売上が4,000万に達し、県外からの注文が全体の80%を占めるようになる。更に、1993年には石鹸の製造原理を活用した「まぜたらせっけん」を発売する。一晩置くだけで廃油が石鹸になる手軽さと、原理の面白さから国内の消費者団体、学校、さらには海外からも注文が殺到する。増える受注に対応するため、当時下請け作業が減っていた他の共同作業所にも仕事を発注し対応した。石鹸のネーミングも工夫した。石鹸と言えば、「～石鹸」という名前がほとんどだが、笠原氏は、「白雪の詩」「なるせのせおと」「かおりの思い出」といった形でネーミングし、散文をパッケージに入れるといったユニークな取組をはじめた。なんともいえない手作り感と、ネーミングによって全国展開の大手雑貨店のバイヤーも着目し、店頭に並ぶようになる。90年代後半のインターネットの黎明期においても個人のホームページや掲示板でロコミで広がっていった。障がい者が作ったものを買ってもらうのではなく、いいものを買ったらそれが障がい者が作ったものだったということを実現している。現在石鹸の種類は150種類以上、売上は2億円に達し、受注増に供給側が対応できない状況である。



石鹸の包装の様子

## 自信と誇りの再生: 今日できることは明日やろう、失敗は他人のせい

ねば塾の塾訓である。障がい者は小さい頃から健常者と比較され、怒られてきた子供達が多い。そんな状況では自信や誇りは育たない。ねば塾では、彼らが自信と誇りを持って働けるように、最初から仕事ができることは求めない。20年くらいかけて育つ子もいるという前提で、気長にのんびりと働くことを楽しんでもらう。例えば自閉症の子供の場合、最初の二年くらいは外に飛び出して行ったのを追いかける...という事で時間が過ぎる。しかし、石鹸を並べさせたらとても几帳面にきれいに並べるということがわかった。他の子は並べるのが下手でこれまで石鹸の数を算定するのが大変だったが、今、彼は大事な戦力としてねば塾に貢献している。

団体名：有限会社 ねば塾  
代表者 笠原 慎一  
住 所：長野県佐久市  
HPアドレス：http://www.neba.co.jp/